

信 行 要 文 ⑤

第十三回 法華講夏期講習会 第五期

(平成二十八年七月三日)

皆さん、おはようございます。

本年度法華講の夏期講習会も、本日が最終日でございます。皆様方には、普段から信行に励まれ、特に本年度の折伏誓願のために御精進のことと思います。

さて、本日は八番目の『御義口伝』から始めます。前回、この御文の途中まで講義をしたのですが、時間の関係で最後までできませんでした。しかし、やはり御書の全文を通してお話ししませんとなかなか意味が伝わりませんので、もう一度、八番目の『御義口伝』の御文を最初からお話をしていきたいと思ひます。

8 御義口伝

建立御本尊等の事 御義口伝に云はく、此の本尊の依文とは如来秘密神通之力の文なり。戒定慧の三学、寿量品の事の三大秘法是なり。日蓮慥かに。靈山に於て面授口決せしなり。本尊とは法華經の行者の一身の当体なり云云。(御書一七七三二行目)

『御義口伝』は、皆さんも御承知の通り、宗門にとりまして極めて重要な御書の一つに挙げられる相伝書であります。ただいま拝読したのは、その「寿量品二十七箇の大事」のなかの「第廿五 建立御本尊等の事」の御文であります。

法華經は、釈尊一代五十年の説法中、真実最勝最尊の教説にして、三説超過の大法、随自意の仏説、釈尊出世の本懐として説かれた諸經中王の經典であり、なかんずく、この寿量品は法華經本門の正宗分であります。

この正宗分と申しますのは、お経は序分と正宗分と流通分の三段に分けられるのでありますけれども、序分というのは、いわゆる序論であります。それから正宗分は、一經の本論となる部分であり、流通分は後世に流通するために説かれた部分を言うのであります。

この寿量品は、法華經のなかの肝心中の肝心、本門の正宗分であり、開近顯遠、すなわち釈尊が久遠の仏であることを明かされている、たいへん重要な一品であります。

すなわち、釈尊は五百塵点劫の昔に菩薩道を行じて仏と成り、それ以後、常に娑婆世界に在って種々に法を説き、衆生を教化してきたのであります。その間、燃灯仏として現れ、あるいは入滅するなど説かれてきましたが、これらはすべて方便として説か

れたものであって、実には滅度することはなく、滅度したというのも方便に過ぎず、久遠常住であることを示されているのであります。

この久遠実成を明かした寿量品は、法華経の中心であるとともに、釈尊の一代説教の眼目です。久遠の開顕は、迹門では単に可能性として示され、本門に来たって久遠五百塵点劫の成道がはっきりと明かされるのであります。しかし、釈尊が五百塵点劫の昔に仏果を成じたという結果、つまり本果は明かされましたけれども、それでは、何によって、どのようにして成仏したのかという原因、つまり本因については、

「我本行菩薩道（我本菩薩の道を行じて）云云」（法華経 四三三）としか説かれていないのであります。

この成仏の原因、すなわち本因である成仏の種子の法を説いたのが久遠の本仏であり、それはすなわち、地涌の菩薩の上首・上行の再誕として末法に御出現あそばされた宗祖大聖人様なのであります。

さて、本文について申し上げますと、まず本文に「**此の本尊の依文とは如来秘密神通之力の文なり**」とあります。

「依文」と申しますのは、依りどころとなる文証のことで、すなわち寿量品に建立する本尊の依文とは「如来秘密神通之力」の文であると仰せられているのです。

その「如来秘密神通之力」とは、寿量品の仏の境界を説かれた御文でありまして、「如来秘密」は体の三身にして、「神通之力」は用の三身の意があります。

天台大師は、この「秘密」について『法華文句』に、

「秘密とは、一身即三身なるを名づけて秘と為し、三身即一身なるを名づけて密と為す。又昔説かざる所を名づけて秘と為し、唯仏のみ自ら知りたもうを名づけて密と為す」（学林版文句会本下 二七八）

と釈されております。

爾前権経では法報応の三身が各別に説かれ、各々、法身仏、あるいは報身仏、あるいは応身仏を立てますが、一身に三身が具備するとは説かれず、さらに諸経によっては、単に法身、あるいは応身のみというように、三身が整足して説かれることはなかったのです。しかし、法華経では爾前各別の三身が整足されて、一身即三身・三身即一身を明かされたのであります。

天台大師は「秘密」について、寿量品の仏は法報応三身に各々三身を具した、俱体俱用の仏、つまり体も用も俱に具わっている仏様であって、ただ仏のみ知るところである故に「秘密」と言うのであると説かれております。

また「神通之力」につきましては、

「神通之力とは三身の用なり。神は是れ天然不動の理、即ち法性身なり。通は是れ無壅不思議の慧、即ち報身なり。力は是れ幹用自在、即ち応身なり」（同）

と説かれております。すなわち神通之力とは、寿量品の仏に具わる法報応三身それぞれ

の用はたらきを顕されたものであります。

さらに、大聖人様は『諸法実相抄』に、

「釈迦・多宝の二仏と云ふも用の仏なり。妙法蓮華經こそ本仏にては御坐し候へ。經に云はく『如来秘密神通之力』是なり。如来秘密は体の三身にして本仏なり、神通之力は用の三身にして迹仏ぞかし。凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり」(御書 六六五五〇)

と仰せられ、妙法蓮華經こそ体の仏、本仏であり、釈迦・多宝の二仏は用の仏、迹仏であると説かれているのであります。

体とは法の本体、実相であり、用とは体に具わる用りきゆうき、力用を言います。文上の立場では、法華經の寿量品に明かされた五百塵点劫成道の仏が本仏であり、それ以後に現れた様々な仏や菩薩は垂迹すいじゃくとなるのであります。文底觀心の上から拝するならば、久遠元初の自受用身が本仏であり、これに対すると、五百塵点劫成道の仏も迹仏、垂迹の仏となります。

末法の御本仏日蓮大聖人様は、久遠元初自受用報身の再誕として末法に御出現あそばされたのであります。「釈迦・多宝の二仏と云ふも用の仏なり。妙法蓮華經こそ本仏にては御坐し候へ」との仰せは、釈迦・多宝の二仏といっても、本仏である妙法蓮華經の仏から現れた用の仏であり、妙法蓮華經それ自体が本仏であるとの御教示であります。

『御義口伝』に、

「されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり。無作三身の宝号を南無妙法蓮華經と云ふなり」(同 一七六五〇)

と述べられておりますように、南無妙法蓮華經とは末法の法華經の行者、すなわち無作三身如来の宝号であります。人に即して法、法に即して人、すなわち人法体一であります。ですから「妙法蓮華經こそ本仏」との仰せは、大聖人様御自身を指しているお言葉なのです。

また「凡夫は体の三身にして本仏ぞかし」とは、大聖人様が末法に凡夫として、いわゆる示同凡夫じどうぼんぶとして御出現あそばされましたが、この凡夫のままの大聖人様が、実は久遠の本仏であるという意味です。したがって、妙法を受持する末法出現の大聖人様御自身が本仏である故に、また大聖人様の教えを信じて題目を受持し唱える者も、成仏という大きな功德を得ることができるという意義が存するのであります。

これに対し「仏は用の三身にして迹仏なり」と仰せであり、つまり釈迦・多宝は本体から派生するところの分々のぶんぶん仏、用の三身であると御指南あそばされているのです。つまり、久遠元初人法一箇の妙法蓮華經を御所持あそばす凡夫即極の日蓮大聖人様が「如来秘密」すなわち、体の三身であり、本仏であるのに対して、釈迦・多宝の二仏をはじめ三世十方の諸仏は「神通之力」すなわち、用の三身で迹仏として現れるのであります。

しこうして「如来秘密」は体の三身、「神通之力」は用の三身であり、共に大聖人様

の一身および心具の十界三千でありまして、大御本尊それ自体であります。

故に『三大秘法抄』には、

「寿量品に建立する所の本尊は、五百塵点の当初より以来、此土有縁深厚・本有無作三身の教主これ積尊是なり。寿量品に云はく『如来秘密神通之力』等云云」（同 一五九四ぎ）

と仰せあそはされているのです。

次に「**戒定慧の三学、寿量品の事の三大秘法是なり**」と仰せであります。戒定慧の三学とは、仏道を修行する者が必ず修学しなければならない戒学・定学・慧学の三つのことです。

最初の「戒」は禁戒で、身口意の三業の悪を止め、非を防いで善を修することであり、次の「定」は禅定で、心を一所に定めて雑念を払い、安定した境地に立つことです。そして「慧」は智慧でありまして、煩悩を断じて真理を照らし顕すことでもあります。

戒定慧の三学は、それぞれ経・律・論の三蔵に説かれておりまして、また三学相互の関係は、戒によって定を助け、定によって慧を発し、慧によって仏道を証得すると説かれております。

爾前の諸経におきましても戒定慧の三学は説かれてはおりますけれども、法華経に来て初めて、この戒定慧の三学は妙法に具わることが明かされたのであります。

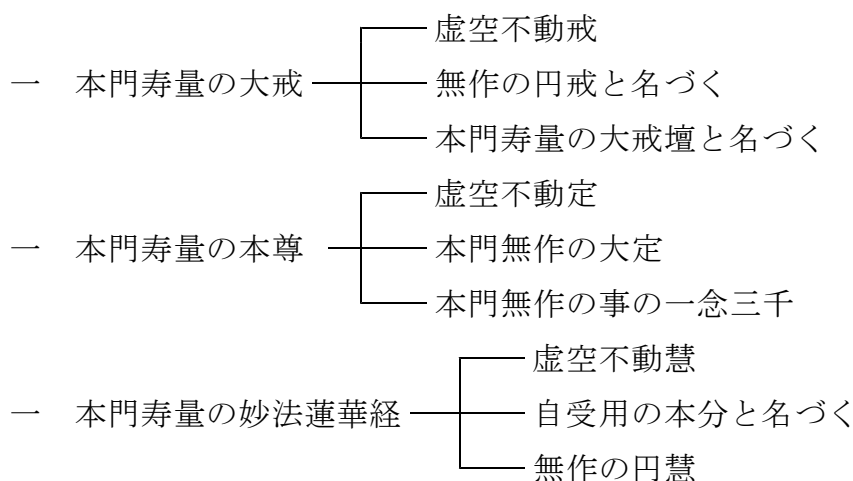
伝教大師は『学生式問答』巻五で、

「三学俱に伝うるを名づけて妙法と曰う」

と述べられております。

また『上行所伝三大秘法口決』に示される図表には、

「



」

（御書 一七〇三ぎ）

と示されております。

つまり、戒定慧の三学は三大秘法でありまして、定は本門の本尊、慧は本門の題目、戒は本門の戒壇に当たるのです。

そして「**日蓮たし慥りょうぜんかに 靈山めんじゅに於て面授くけつ口決せしなり**」と仰せであります、この御文は『三大秘法抄』の、

「此の三大秘法は二千余年の当初そのかみ、地涌千界の上首として、日蓮慥かに教主大覺世尊より口決せし相承くけつなり」(同 一五九五べ)

と仰せの御文と同じで、大聖人様は二千余年の当初、地涌千界の上首として教主大覺世尊より付嘱ふぞくを受けたと述べられているのであります。

ただし、上行菩薩として釈尊から妙法を遺付されたと説くのは、これは外用げゆうの姿であり、内証じんび深秘の上から言うならば、大聖人様は久遠元初の自受用身、すなわち末法の御本仏であります。

よって『文底秘沈抄』には、

「血脈抄に云わく『久遠名字已来本因本果の主、本地自受用報身の垂迹上行菩薩の再誕、本門の大師日蓮』等云云。若し外用せんごんの浅近に拠れば上行の再誕日蓮なり。若し内証の深秘に拠れば本地自受用の再誕日蓮なり。故に知んぬ、本地は自受用身、垂迹は上行菩薩、顕本は日蓮なり」(六卷抄 四九べ)

と、甚深の意をもって仰せられております。

また『百六箇抄』には、

「今日蓮が修行は久遠名字の振る舞ひに介爾計りけにぼかも違はざるなり」(御書 一六九五べ)

と仰せられ、同じく『百六箇抄』に、

「久遠の釈尊の修行と、今日蓮が修行とは介爾計りけにぼかも違はざる勝劣なり」(同 一六九六べ)

と、甚深の意を仰せあそばされているところからも、その意がお解りになると思います。

次に「**本尊とは法華經の行者の一身の当体なり**」とありますが、この御文は末法の法華經の行者、すなわち大聖人様の一身の当体が御本尊であるとの、まことに大事な御教示であります。

そもそも「法華經の行者」というのは法華經の教説に従って修行をする者のことで、法華經たもを持ち、法華經を流布する人のことでもあります。

例えば、法華經を説かれた釈尊をはじめ、一切衆生に仏性があるとして但行たんぎょうらいはい礼拝した不輕菩薩ふきょうや、あるいは像法時代に現れて法華經を弘めた天台大師、あるいは伝教大師も、法華經の行者であります。

さらに、末法こんじ今時におきまして末法の法華經である三大秘法の南無妙法蓮華經を信受し実践修行する者、つまり私どもも総じては法華經の行者と言えるわけです。

しかし、別しては『撰時抄』に、

「日蓮は日本第一の法華經の行者なる事あえて疑ひなし」(同 八六四べ)

と仰せのように、別しては宗祖日蓮大聖人様が法華經の行者であります。

されば『聖人知三世事』には、

「後五百歳には誰人を以て法華經の行者と之を知るべきや。予は未だ我が智慧を信ぜず。然りと雖も自他の返逆・侵逼、之を以て我が智を信ず。敢へて他人の為にするに非ず。又我が弟子等之を存知せよ。日蓮は是法華經の行者なり。不輕の跡を紹継するの故に。輕毀する人は頭七分に破れ、信ずる者は福を安明に積まん」(同 七四八頁)

と仰せられ、まさに「日蓮は是法華經の行者なり」と明言あそばされております。

さらに『真言諸宗違目』には、

「仏陀記して云はく『後五百歳に法華經の行者有って、諸の無智の者の為に必ず悪口罵詈・刀杖瓦石・流罪死罪せられん』等云云。日蓮無くば釈迦・多宝・十方諸仏の未來記は当に大妄語なるべきなり」(同 六〇一頁)

と仰せであり、この御文からも、まさしく大聖人様が法華經の行者であることが明確であります。

また『寂日房御書』には、

「日蓮は日本第一の法華經の行者なり。すでに勸持品の二十行の偈の文は日本国の中には日蓮一人よめり。八十万億那由他の菩薩は口には宣べたれども修行したる人一人もなし」(同 一三九三頁)

と仰せであり、さらに『聖人御難事』には、

「仏の大難には及ぶか勝れたるか其れは知らず。竜樹・天親・天台・伝教は余に肩を並べがたし。日蓮末法に出でずば仏は大妄語の人、多宝・十方の諸仏は大虚妄の証明なり。仏滅後二千二百三十余年が間、一閻浮提の内に仏の御言を助けたる人但日蓮一人なり」(同 一三九六頁)

と仰せられております。まさに大聖人様を除いて法華經の行者はなし、と仰せられているのであります。

そして『御義口伝』には、

「如来とは釈尊、総じては十方三世の諸仏なり、別しては本地無作の三身なり。今日蓮等の類の意は、総じては如来とは一切衆生なり、別しては日蓮が弟子檀那なり。されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり。無作三身の宝号を南無妙法蓮華經と云ふなり」(同 一七六五頁)

と仰せのように、法華經の行者とは末法の御本仏の異名であります。このことをよくよく知るべきであります。

次に九番目に入ります。

9 御義口伝

御義口伝に云はく、法師ほっしとは五種の法師ろっこんしやうじやうなり、功德とは六根清浄の果報なり。所詮いま今日蓮等の類たぐい南無妙法蓮華經と唱へ奉る者は六根清浄なり。されば妙法蓮華經の法の師と成りて大きな徳さいわい有るなり。功も幸くと云ふ事なり。又は悪を滅するを功と云ひ、善を生ずるを徳と云ふなり。功徳おおきなるさいわいとは即身成仏こころうなり、又六根清浄なり。法華經の説の文の如く修行するを六根清浄と意得べきなり云云。(御書一七七五ぎ一行目)

この御文は『御義口伝』で、法師功德品第十九の題号について御教示あそばされている箇所であります。

初めに「法師ほっしとは五種の法師なり」と仰せであります。五種法師とは「五種の妙行」とも言いまして、法華經の受持・読・誦・解説・書写の修行を言うのであります。

初めの「受持」は、教法あるいは經文を受け持つたもという意味であります。次の「読」は經文を読み上げること、「誦」は經文をそらんずること、暗誦あんしやうすることです。そして「解説」というのは、經典の意義を理解して、それを他人ひとに説き聞かすことで、最後の「書写」は、經文を書き写すことです。

これが五種法師と言われるものであります。『日女御前御返事』に、

「法華經を受け持ちて南無妙法蓮華經と唱ふる、即ち五種の修行を具足するなり」(御書 一三八九ぎ)

と、末法では法華經を受け持つ、つまり受持することは即、この五種の修行を全部、具足することだとおっしゃっているのであります。つまり、受持をもって末法の正行とし、その他の読・誦・解説・書写の修行はすべて、この受持の一行のなかに含まれるとの仰せであります。すなわち、末法本因下種の仏法においては、三大秘法の御本尊を受持することが、そのまま悟りを得る観心修行となるのでありまして、このことを「受持即観心」と言うのであります。

大聖人様は、末法の三毒強盛ごうじやうの衆生の成仏のために、事の一念三千の南無妙法蓮華經を本門の本尊として顕され、この御本尊を信じて南無妙法蓮華經と唱えるという、いわゆる受持の一行をもって、末法の観心修行とされたのであります。

したがいまして『御義口伝』には、

「此の妙法等の五字を末法白法びやくほうおんもつ隱没の時、上行菩薩御出世有って五種の修行の中には四種を略して但受持ただの一行にして成仏すべしと經文まのあたに親これり之在り」(同 一七九五ぎ)

と仰せられております。

さらに大聖人様は、この受持の一行の功德につきまして、『観心本尊抄』のなかに、「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す。我等此の五字を受持すれば自然じねん

に彼の因果の功徳を譲り与へたまふ」(同 六五三頁)

と仰せられております。釈尊が成仏するために積んだ因行と果徳は、すべて南無妙法蓮華經の御本尊に収まっており、これを受持信行する衆生は、そのまま觀心の悟りを成就して、廣大なる功徳を受けることができると、甚深の意をお示しあそばされているのであります。

次に「功徳とは六根ろっこんしやうじやう清淨の果報なり。所詮いま今日蓮等たぐいの類南無妙法蓮華經と唱へ奉る者は六根清淨なり」と仰せであります。が、「功徳」というのは「功能福徳」とか「積功累徳しやっくゝるいとく」の意で、「功」は福利を招く功能であり、「徳」は得という意味で、功能が善行に徳として具わっていることを功徳と言うのであります。

この功徳について、法華經の法師功徳品には、

「是の法華經を受持し、若しは読み、若しは誦し、若しは解説し、若しは書写せん。是の人は、当に八百の眼まなこの功徳、千二百の耳の功徳、八百の鼻の功徳、千二百の舌の功徳、八百の身の功徳、千二百の意こころの功徳を得べし。是の功徳を以て、六根を莊嚴して、皆清淨ならしめん」(法華經 四七四頁)

と説かれておりました。法華經を受持する者は、今言ったように、八百の眼の功徳、千二百の耳の功徳、八百の鼻の功徳、千二百の舌の功徳、八百の身の功徳、千二百の意の功徳を得ることができると仰せられております。

そして「されば妙法蓮華經の法の師と成りて大きなる徳さいわい有るなり。功も幸くと云ふ事なり」と御指南であります。

「法の師」つまり法師とは、仏法ぶつだつに通達し、眞実の教法によって教え導く僧のことです。すなわち、常に法を説き、淨行を修め、世の人々の規範となり、人の師となる者を、このように言うのであります。そしてまた、法華經を弘めるための修行法自体も、五種法師と称しております。

したがって、この「妙法蓮華經の法の師」とは、つまり妙法蓮華經の法を弘める者という意味であり、今、妙法蓮華經を弘める者は多くの功徳、すなわち最高の幸せを必ず得ることができると確言あそばされているのであります。

続いて「又は悪を滅するを功と云ひ、善を生ずるを徳と云ふなり。功徳とは即身成仏なり、又六根清淨なり」とお示しです。つまり、功徳の「功」とは悪を滅することであり、「徳」とは善を生ずることであると仰せですが、この御文を私達の信心に当てはめてみますと、まさしく「悪を滅し、善を生ずる」とは何かと言え、これは我々の自行化他にわたる信心を指しているのではないかと思います。

眞の幸せを得るため、即身成仏のため、我が身の六根清淨のためになすべきは、自行化他にわたる信心こそが最も肝要なのであります。

次に「法華經の説の文の如く修行するを六根清淨と意得べきなり」と仰せであります。が、末法において「法華經の説の文の如く修行する」というのは、自行化他にわたる

信心に励むことでもあります。つまり、御金言のままに自行化他にわたる信心に励むところ、六根清浄の功德を得ることができると仰せられているのであります。

されば『持妙法華問答抄』には、

「^{すべから}須く心を一にして南無妙法蓮華經と我も唱へ、^{すす}他をも勧めんのみこそ、^{こんじょう}今生人界の^{おもいで}思出なるべき」(御書 三〇〇^ぎ)

と仰せられ、『妙密上人御消息』には、

「^い已今当の經文を深くまぼり、^守一經の肝心たる題目を我も唱へ人にも^{すす}勧む。麻の中の^{よもぎ}蓬、^打墨うてる木の自体は正直ならざれども、^{じねん}自然に直ぐなるが如し。經のまゝに唱ふればまがれる心なし。当に知るべし、^み仏の^み御心の我等が身に入らせ給はずば唱へがたきか」(同 九六七^ぎ)

と示されております。

また『御義口伝』には、

「^{かん}勧とは化他、^じ持とは自行なり。南無妙法蓮華經は自行化他に^{わた}亘るなり。今日蓮等の^{たぐい}類南無妙法蓮華經を^{すす}勧めて持たしむるなり」(同 一七六〇^ぎ)

と仰せです。すなわち、私達の一生成仏のためには、まず自行化他にわたる信心に励むことこそが最も肝要であると、このように重々の御指南を仰せあそばされているのであります。

それでは、次に十番です。

10 御義口伝

病とは三毒の煩惱なり。仏菩薩に於ては不老は釈尊、不死は地涌と顯はれたり。是は滅後^{とうこん}当今の衆生を説かれたり。然れば病とは謗法なり。此の經を受持し奉る者は病即消滅疑ひ無きなり。(御書一七八七^ぎ五行目)

これは『御義口伝』の「薬王品六箇の大事」のなか、第六番の「^{にやくにん}若人有病 ^{とくもん}得聞是經 ^{ぜきょう}病即消滅 不老不死の事」すなわち、

「^も若し人^{やまい}病有らんに、是の經を聞くことを^え得ば、病即ち消滅して不老不死ならん」
(法華經 五三九^ぎ)

の御文について説かれているなかの一文であります。

初めに「**病とは三毒の煩惱なり**」とあります。「三毒」というのは善根を毒する煩惱であり、^{とんじんち}貪瞋癡の三毒と言われるように、貪・瞋・癡の三つのことでもあります。「貪」とは^{むさぼ}貪欲・貪愛、貪り愛することで、「瞋」とは^{しん}瞋恚でありまして、^{いか}瞋りのことでもあります。また「癡」とは^{おろ}愚癡、無知で、癡かなことでもあります。

『大智度論』には、この貪瞋癡について、

「三毒は一切の煩惱の根本と為す」
と説かれております。

また『大乘義章』という書物には、

「三毒は一切の煩惱を摂し、すべての煩惱が衆生を害するのは毒蛇の如く、また毒竜の如きである故に毒と名づける」(取意)

と、また三毒が充満した時には、個人だけではなく、一国をも不幸にし、「小の三災」の原因となると説かれておるわけであります。つまり、今日の様々な混乱は、まさにこの三毒が強盛なるが故であります。

このなかで「小の三災」ということが言われておりますけれども、小の三災というのは滅劫の終わりに起こる三つの災害です。一番目は刀兵災で、刀は武器のこと、兵は兵隊のことでありますから、戦争が起きるということでもあります。二番目は疾疫災で、伝染病などがはびこるといことです。それから三番目が飢饉災で、天災などによって五穀が実らず、飢饉が起こることあります。

ちなみに、このほかに「大の三災」というのもありまして、一番目が火災、二番目が水災、三番目が風災であります。

このうちの火災は、経典によりますと、七個の日輪が同時に現れて、世界を焼き尽くすと説かれております。その炎は、下は無間地獄から、上は色界の初禪天に至るとされ、つまり宇宙法界を焼き尽くすといことです。二番目の水災は洪水が起きて、下は無間地獄から、上は色界の第二禪天に至るまで水があふれ、まさに世界中が洪水になると言うのです。三番目の風災は、下は無間地獄から、上は色界の第三禪天に至るまで、つまり宇宙一切が風のために飛散すると説かれています。

このように言われておりますけれども、病とは、こうした三災等の悪現象の原因となる「三毒の煩惱」のことを言うのであり、すべての混乱の原因は貪瞋癡の三毒で、これが病を起こし、その病が世間を滅ぼすといことあります。

次に「**仏菩薩に於ては不老は釈尊、不死は地涌と顕はれたり**」とありますが、これは『百六箇抄』に、

「本果妙の釈尊が本因妙の上行を召し出だす事は、一向に滅後末法利益の為なり」(御書 一六九六頁)

と示されております。つまり、釈尊は師にして本果妙、すなわち果であり、地涌は弟子にして本因妙、すなわち因であります。これを不老不死に配しまして「不老は釈尊、不死は地涌」と、甚深の意を仰せあそばされているのであります。

続いて「**是は滅後当今の衆生を説かれたり。然れば病とは謗法なり**」とあります。

薬王品の御文は、釈尊滅後、末法の衆生のために説かれたものでありますから、病とは何かと言え、謗法のことであると仰せられているのです。

そもそも、謗法につきましては『顕謗法抄』に、

「五逆罪より外の罪によりて無間地獄に墮ちんことあるべしや。答へて云はく、誹謗ひぼう正法しょうぼうの重罪なり。問うて云はく、証文如何。答へて云はく、法華經第二に云はく『若し人信ぜずして此の經を毀謗せば乃至其の人命終みょうじゅうして阿鼻獄あびごくに入らん』等云云」(同 二七九頁)

と説かれており、また『十法界明因果抄』には、

「法華經に云はく『若し人信ぜずして此の經を毀謗せば○常に地獄に処すること園觀おんかんに遊ぶが如く、余の惡道しやたくに在ること己が舍宅けんどんの如し』文。慳貪・偷盜等ちゆうとうの罪に依つて餓鬼道せじんに墮することは世人やす知り易し。慳貪等無き諸もろもろの善人もぼう法またに依り亦謗法の人に親近し自然に其の義を信ずるに依つて餓鬼道に墮することは、智者あらに非ざれば之これを知らず。能く能く恐るべきか」(同 二〇八頁)

と、謗法の恐ろしさについて御指南あそばされております。

特に、この御書のなかに「慳貪等無き諸の善人」すなわち、欲張りなどの、世に言う悪いことを何もしていない善人であったとしても、「謗法に依り亦謗法の人に親近し自然に其の義を信ずるに依つて」すなわち、謗法を犯すことによって、あるいはまた謗法の人に親近する、近づき仲良くすることによって、謗法の人またの感化を受け、だんだんと考え方がおかしくなってしまう、ついには餓鬼道に墮ちてしまいますよと、大聖人様は謗法の恐ろしさを懇々と説かれているのであります。

ですから皆さん方も、周りのお友達や近所の方に謗法の人達がいたら、やはりその謗法は責めなければだめなのです。

大聖人様は『開目抄』等に、章安大師の『涅槃經疏しよ』に示される、

「慈無くして詐じり親しむは、是れ彼が怨あだなり」(同 五七七頁)

の文を引かれております。慈悲なくして「詐り親しむ」、つまり世間上のお世辞を言い合つて折伏もしないというのは、その人のためにも良くないということです。ですから、きちんと言えばいいのです。折伏は、別にけんかを売っているわけではないのですから、きちんと正しい言葉をもって、正しくこの法を示していけばいいのです。

例えば、大聖人様の教えが、いかにすばらしいかということ、きちんと話していく。それをしないで、「慈無くして詐り親しむ」のは、まさに謗法になる。つまり「詐り親しむ」ということは、その人にとっても、自分自身にとっても、いいことはないのです。だから私達は、この御文をしっかりと心して、勇氣をもってお題目を唱え、これからの戦いに臨んでいかなければならないと思ひます。

さて『御義口伝』の御文に戻りまして、最後に「此の經を受持し奉る者は病即消滅疑すなわひ無きなり」と仰せであります。すなわち、法華經を受持する者は「病即消滅」の功德、疑いなしとおっしゃっているのでありますが、『太田左衛門尉御返事』には、

「然しかるに法華經と申す御經は身心ろうやくの諸病の良薬なり。されば經に云はく『此の經は則すなわち為れ閻浮提の人の病の良薬なり。若し人病有らんに是の經を聞くことを得ば病即

消滅して不老不死ならん』等云云」(同 一二二二^ヱ)

とあります。

さらに『富木尼御前御書』には、

「阿闍世王は法華經を持ちて四十年の命をのべ、陳臣は十五年の命をのべたり。尼ごぜん又法華經の行者なり。御信心は月のまさるがごとく、しをのみつがごとし。いかでか病も失せ、寿ものびざるべきと強盛にをぼしめし、身を持し、心に物をなげかざれ」(同 九五五^ヱ)

と仰せであります。

ここに阿闍世王の例が出てきましたが、阿闍世王はマカダ国の王様でありましたが、太子であった時に提婆達多と親交を結び、その悪に感化せられて、仏教の外護者であった父・頻婆娑羅王を監禁し、獄死させてしまいました。そしてまた、母を幽閉して、自ら王位に即いたのであります。しかし、この阿闍世王は、のちに仏教に帰依し、經典の第一回結集の時には、これを外護しております。

この御文は、要するに、悪逆非道の阿闍世王も、法華經を持つことによって寿命を四十年、延ばすことができたと言っているのです。

それから、次の「陳臣」というのは天台大師の兄でありまして、仙人から一カ月後に死ぬと予言されましたけれども、天台の教えを受けて修行をすることによって、十五年間、寿命を延ばしたと言われております。

これらは、いずれも妙法蓮華經の功德の広大なことを示されているのであります。

また『経王殿御返事』には、

「此の曼荼羅能く能く信じさせ給ふべし。南無妙法蓮華經は師子吼の如し。いかなる病さはりをなすべきや」(同 六八五^ヱ)

と仰せであります。

「師子吼」というのは師子が吼える声のことです。師子は百獣の王で、ひとたび吼えれば、百獣を圧すると言われております。これは、仏を師子に譬えて、仏様の説法を師子吼と言うのです。つまり、南無妙法蓮華經は師子吼のようなものであり、いかなる病も障り、すなわち邪魔をすることができないとおっしゃっているのです。

今日、様々な病があります。身の病、心の病などたくさんありますが、この病を根本から治すのは妙法蓮華經であるということを、私達はしっかり心に刻んで、仏道修行に励むことが肝要であろうと思います。

次は十一番目の『御講聞書』であります。

1 1 御講聞書

此の題目の五字、我等衆生の為には三途の河にては船となり、紅蓮地獄にては寒を

のぞき、^{しょうねつじごく}焦熱地獄にては涼風となり、^{しで}死出の山にては蓮華となり、^{かつ}渴せる時は水となり、^う飢ゑたる時は食となり、^{はだか}裸なる時は衣となり、^{けんぞく}妻となり子となり眷属となり家となり、^{むきゆう おうゆう ほどこ}無窮の応用を施して一切衆生を利益し給ふなり。^{りやく}直至道場とは是なり。^{じきし}仍って此の身取りも直さず寂光土に居るを直至道場とは云ふなり。^{これ}直の字に心を留めて之を案ずべし云云。(御書一八三五^ど一^{とど}二行目)

『御講聞書』は『日向記』とも言いまして、

「弘安元年^ご三月十九日より連々の御講、同三年五月二十八日至る、仍って之を記し畢んぬ」(御書 一八一八^{おわ})

と記されておりますように、弘安元(一二七八)年から同じく三年までの、身延山における大聖人様の法華經の御講義を、六老僧の一人である^{みんぶ}民部日向が筆録したものであります。内容的には「妙法蓮華經序品第一の事」から「本来の^{しぐ}四弘の事」まで九十二カ条にわたって、法華經について述べられています。

『御義口伝』と比べますと、大聖人様の御法門について、より深く述べられていない点もありますが、大聖人様の晩年の御講義に触れるという意味において、貴重な書であることは間違いありません。

そのなかで、当文は譬喩品第三の、

「^{じょうし}乗 此宝乗 直至道場」(法華經 一七〇^ど)

とある御文について述べられている箇所であります。これは、

「此の宝乗に^{じょう}乗じて 直ちに道場に至らしむ」(同^ど)

と読みます。すなわち、法華經を行ずる者は、その功德によって、凡夫の身で直ちに妙覺の仏果を得ることができるとの意であります。

「宝乗」とは^{だいびやく ごしゃ}大白牛車でありまして妙法を表し、これに「乗」ずるというのは、妙法を信受することでありまして、また「直至」とは^{じきたつしょうかん}直達正觀、つまり正しく真理を観察するとともに、その仏の境地に達することを言うのです。そして「道場」というのは菩提、すなわち悟りであり、仏果のことです。故に、末法の一切衆生は、妙法を信受することによって即身成仏することができると仰せられているのです。

まず「**此の題目の五字、我等衆生の為には^{さんず}三途の河にては船となり**」とありますが、当文は題目の功德について述べられておりまして、「三途の河」は、人が死んで^{めいど}冥土に行く途中に越えなければならない河であります。この河には^{かんきゆう}緩急の異なる^せ三つの瀬がありまして、生前の罪業によって渡る場所が異なるそうでありまして。その河のほとりには、^{きけい だつえ ば けんねおう}鬼形の奪衣婆・懸衣翁の二つの鬼がおり、着物を奪って樹に懸け、その高下によって罪の軽重を計るとされておりました。このような時に、妙法蓮華經の五字の題目は船となり、三途の河を渡ることができると、妙法蓮華經の功德について仰せになっているのであります。

そして「**紅蓮地獄にては寒をのぞき**」とあるなかの「紅蓮地獄」は、ここに墮ちた者は、寒さのために身体の皮膚や肉が破れて、まさに紅蓮華のようになってしまいます。ですから、南無妙法蓮華經を受持信行する者は、このような地獄に墮ちることはないとおっしゃっているのです。

次に「**焦熱地獄にては涼風となり**」とあります。「焦熱地獄」というのは、殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒、あるいは邪見の者が墮ちる地獄でありまして、罪人は熱鉄や鉄の釜の上に置かれ、身を焼かれて苦しめられると言われます。このような時には、お題目は涼風となり、焦熱の地獄から逃れ出ることができると仰せられております。

また「**死出の山にては蓮華となり**」とありますが、「死出の山」とは、死後に越えていかなければならない山のことで、「蓮華」とは南無妙法蓮華經のことです。すなわち死後、険しい山を越えなければならぬ時には、妙法蓮華經のお題目となって、険しい山も必ず乗り越えることができるとおっしゃっているのです。

その続きには「**渴せる時は水となり**」、のどが渴いた時には水となり、「**飢ゑたる時は食となり**」、飢えた時には食べ物となり、「**裸なる時は衣となり**」、裸の時には衣服となり、「**妻となり子となり眷属となり家となり**」、妻や子、眷属すなわち一族となり、また住み憩う家となって、この妙法蓮華經は私どもを守ってくださる、とおっしゃっているのです。

そして「**無窮の応用を施して一切衆生を利益し給ふなり**」とあります。「無窮」とは、窮まりのないという意味で、果てのないこと、限りのないことです。また「応用」というのは、仏が衆生を救うために、それぞれに応じた用きをするを言います。すなわち、仏様は限りなき慈悲と用きをもって、私ども一切衆生を利益し給うとの仰せであります。

次に「**直至道場とは是なり。仍って此の身取りも直さず寂光土に居るを直至道場とは云ふなり。直の字に心を留めて之を案ずべし云云**」とあります。「直至道場」というのは、直ちに道場に至り、三毒強盛の者が妙法の功德によって常寂光土に至ることができることを言います。直至道場の「直」の字に心を留めて信心に励むように、ここに御教示あそばされているのであります。

当文は、題目を唱える功德は計り知れないと、まさに題目の功德について仰せられております。ただし、ここで大事なことは、題目の功德は勝れていても、題目を唱えることがなければ、題目の功德は顕れないのであります。

「四力成就」という言葉がありますが、これは仏力・法力・信力・行力の四つです。この四つが成就して功德があるのですが、仏力と法力は既に御本尊様にまします。残り、私達の信力と行力です。結局、我々が幸せになるためには私達の信力・行力が盛んでなければならぬのです。つまり、信力・行力によって初めて、我々の即身成仏、また真の幸せを確立することができる、とおっしゃっているのです。

最後の御書です。

12 御講聞書

法華經の意は一華一香の小善も法華經に帰すれば大善と成る。縦ひ法界に充滿せる大善なりとも、此の經に値はずんば善根とは成らず。譬へば 諸の河水大海に入りぬればうしほの味と成る。入らざれば本の水なり。法界の善根も法華經へ帰入せざれば善根とは成らざるなり。(御書一八三六〇二行目)

これは、譬喩品第三の、

「若人^{にやくにん}不信 毀謗^{きぼうしきょう}此經 則断一切 世間^{せけん}仏種^{ぶつしゆ} (若し人信ぜずして 此の經を毀謗せば 則ち^{すなわ}一切 世間の^{せけん}仏種^{ぶつしゆ}を断ぜん)」(法華經 一七五〇)

の御文について述べられた箇所であります。

初めに「法華經の意は一華一香の小善も法華經に帰すれば大善と成る」と仰せですが、これは法華經の廣大なる功德を示されたものでありまして、「一華一香の小善」すなわち、仏前に一つの華^{はな}、一つの香を供える、わずかな善であっても、法華經に帰依するものであれば大善となるとの仰せです。

お經のなかに、仏様に子供が砂のまんじゅうを御供養した話があり、その功德の大なることが説かれております。本当にわずかな、たとえ砂のまんじゅうであったとしても、その^{こころざし}志が尊いという意味です。

この御文も、それと全く同じでありまして、つまり一華一香を供えるといった本当に小さな善であっても、それが仏様に対する正しい志であれば、その功德はまことに大きいということでもあります。

そもそも「小善」とは小さな善事のこと、これに対して「大善」があります。この大善とは大きな善事のことですが、相対的な概念でありまして、より大きな善に対しては、大善も小善となります。実は、仏法のなかにも大善と小善がありまして、例えば、小乗經は小善であるのに対して大乘經は大善であり、また権大乘經は小善であるのに対して法華經は大善となるのです。

また、法華經のなかにおきましても文上と文底があり、文上は小善、文底は大善となります。ですから、この文底に示される觀心の本尊は、まさに大善中の大善であります。

末法今時におきましては、三大秘法の南無妙法蓮華經が究極の大善となるのでありますから、一切の思想、一切の宗教を相対すれば、それらはすべて小善なのです。そして、小善が大善に反するようなことがあれば、それは、今度は大悪となってしまうのであります。これは、邪義邪宗の姿を見れば一目瞭然であります。

つまり、大善たる大聖人様の正しい仏法^{そむ}に対して背く者は、たとえ、そのなかに小善

があったとしても、その小善は、大善に背くが故に大悪となるのです。創価学会の姿を見たら解るでしょう。そのほかの邪義邪宗の姿を見ても、みんな解ります。あれらは一往、宗教であり、世間的には善とされていても、大聖人様の仏法に反する限り、絶対に善にはならない、悪なのです。その悪は、私達が滅していかなければならないのであります。

したがって、このあとに「**縦^{たと}ひ法界に充滿せる大善なりとも、此の経^あに値はずんば善根とは成らず**」と、大聖人様はおっしゃっております。たとえ「法界」すなわち十界三千の森羅万象^{しんらばんしょう}の境界に満ちる大善であったとしても、所詮「此の経」すなわち文底下種の南無妙法蓮華経に値わなければ、真実の「善根」にはならないのです。善根というのは、木の根に譬えた語でありまして、善を生ずる元となるものであります。正法に帰依し、身口意の三業にわたって仏道修行に励むことが、まさに最高の善根となるのです。

次に「**譬^{もろもろ}へば 諸^{かすい}の河水大海に入りぬればうしほの味と成る。入らざれば本^{もと}の水なり**」とあるのは、例えば、諸々の河の水も海に流れ込めば「うしほ」すなわち、海水の味となるけれども、海に入らなければ元のままの水である、という意味であります。

まさに、私達は多くの人達を折伏して、信心の味わいを示すべきであります。皆さん方の周りには色々な人が、たくさんいらっしゃると思います。それらのすべての人に、大聖人様の仏法を説くべきなのです。私達が自分勝手に選^より好みをせず、どんな人にも法を説いていくことが非常に大事であります。

もちろん、縁がありますから、その縁を頼っていくことも大事です。けれども、私達は一切衆生救済の大法を戴いているのですから、我々の精神としては、あくまでも一切衆生を救っていくことが大事です。どんな人でも救うという大きな慈悲の心を持っていないと、折伏の時に、どこかおかしくなってしまうことがあるのです。ですから、どんな人でも救う、一切衆生救済の大慈大悲をもって、私達は折伏に臨むことが最も肝心であると思います。

したがって、最後に「**法界の善根も法華経へ帰入せざれば善根とは成らざるなり**」とお示しであります。「法界」すなわち、十界三千の森羅万象の境界の「善根」つまり、諸善を生み出すところの根本となるものといっても、「法華経」すなわち妙法蓮華経に帰依しなければ、先程も言った通り善とはならず、逆に悪になってしまうのです。

妙法蓮華経に帰依しなければ善根とはならないとおっしゃっているのでありますから、私達の行ずる折伏の意義が極めて大きいことを、一人ひとりがしっかりと知るべきであります。

今、宗門は平成三十三年・法華講員八十万人体勢構築へ向かって前進しております。そうしたなかで、特に本年は、なんとしてでも全支部が誓願を達成していかなければならないと思います。

一年一年が大事な戦いでありまして、やはり一年をおろそかにしますと、そのしわ寄せは必ず次の年に来ます。具体的に言えば、去年、誓願を達成できなかった支部は、今年の戦いは厳しいはずですが、しかし、その厳しさのなかに、また功德があるわけだから、しっかりと昨年、取り残した分も、必ず達成していく。そして平成三十三年には、晴れて大聖人様の御宝前に「八十万人達成」をみんなで御報告したいと思います。そのためには一日一日を、しっかりと信心していく、つまり自行化他の信心に励んでいくということです。

一日一日が大事なのです。一年三百六十五日は、一日一日の積み重ねですよ。ですから、今日これからのいつ一時、一日を大事にして折伏していく、法を説いていく、自行化他の信心に励んでいくことが、おのずと必ず誓願達成に結びついていくのであります。

経験がある人もいるでしょうけれども、試験勉強の時に、一夜漬けでやればなんとかなると思ったことがあるでしょう。しかし、どうにもならないのです。やはり、コツコツ、コツコツと勉強していた者にはかないません。それと同じように「時が来たら折伏をやるぞ」「おれだって折伏ぐらいやるよ、時が来れば」と言ったとしても、時は来ないのです。つまり、一日一日を大事に題目を唱え、一日一日を化他行に励む、自行化他の信心に励んでいくところに、一つの成果が現れるのです。また、そこに御仏智も用くのです。だから、一夜漬けのような信心ではだめです。一日一日、しっかりとお題目を唱えて、自行化他の信心に励んでいただきたいことをお願いいたします。

そして、本年の十二月三十一日には、すべての支部が「誓願を達成しました」と、御本尊様の前に堂々と報告できるようにしていただきたいと心から思いますので、皆さん方には、しっかりと頑張ってくださいと思います。よろしくお願いいたします。